

公表

## 事業所における自己評価総括表

○事業所名	児童発達支援センター 倉敷学園		
○保護者評価実施期間	令和7年 12月 18日		～ 令和8年 1月 9日
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	50世帯	(回答者数) 40
○従業者評価実施期間	令和7年 12月 18日		～ 令和8年 1月 9日
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	42	(回答者数) 38
○事業者向け自己評価表作成日	令和8年 2月 16日		

## ○ 分析結果

	事業所の強み(※)だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	クラス職員に限らず、児童発達支援管理責任者や専門職(作業療法士、言語聴覚士、看護師、栄養士等)を含めた多職種の配置をしておき、チームとして支援にあたる体制を整えている。	毎月のクラス会議へは多職種が参加できる日時設定を行っている。 行事毎に、朝礼終礼とは別に全体会を行い、行事の目的や職員それぞれの役割等を共有している。	クラス会議にて事例を通してケース検討を行う時間を設ける等し、職員個々の役割分担や支援方針の共通理解を一層深めていく。またケアコラボ(電子連絡帳、電子記録)を活用し、支援状況の確認を効率的に行い支援の質を向上させる。
2	クラス会議や職員会議、朝礼・終礼、ケアコラボ(電子記録)等を通じて、日常的に情報共有や振り返りを行っている。	勤務時間の都合上、朝礼・終礼への参加が難しい職員に対しては、クラスノートや記録を活用するなど、勤務形態に応じた情報共有の工夫を行っている。	勤務時間や勤務形態にかかわらず必要な情報が確実に共有されるよう、クラスノートや記録内容の記載項目や確認方法を整理・統一する。また、重要事項については口頭共有に加え、デジタルツール等を併用することで、情報伝達の漏れや時差を最小限に抑える仕組みづくりを検討する。
3	こどもの特性や発達段階に応じて、物理的な環境設定や個別エリア、カムダウンスペースの設定など、安全で落ち着いた過ごせる環境づくりに心がけている。	クラス内外に個別対応が可能なスペースを設け、こどもの状態に応じて柔軟に使用している。	保護者の方より、クラス遊具設置に関して危険を感じるご意見や衛生面でのご意見をいただいている。こどもの特性や好きな遊びを含め、クラス全体が安全に過ごすことのできる環境になっているか再検討を行う。

	事業所の弱み(※)だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	国の基準以上の職員配置ではあるものの、細やかな支援の充実を考えると、職員数が十分とは言えず、こどもの特性や個別対応が多い場合には、職員配置に余裕がない場面がある。	安全配慮や情緒面への支援を要するケースが重なると、配置に余裕がなくなる。加えて、勤務時間が職員により異なり、時間帯によって人員が安定しにくいことも一因である。これらの要因が重なり、細やかな支援の充実に向けて職員数が十分とはいえない状況が生じている。	年度毎のこどもの特性や支援内容内容に合わせて、職員の配置や勤務時間の調整を可能な限り行う。
2	施設・設備の老朽化や、一部の環境・衛生面において清潔さの維持が十分でない箇所が見受けられる。	現在の園舎に移転し17年経過しており、急な修繕も増えている。 お子さんの発達年齢を加味すると大人が衛生配慮を行う必要も多くなる。	・施設設備の老朽化について、予算を立て計画的な改善を行っていく。 ・支援中にさっと掃除等ができる物品を用意する(消毒やティッシュ等を各部屋に設置する)
3	法人外の地域園や関係機関との交流が限定的で、継続的な関係づくりに至っていない。	昨年度の評価結果を踏まえ、令和7年4月に近隣園との交流に関する打ち合わせを行っている。市町村の取り決めや園ごとにすでに決まっている地域交流行事があり、福祉事業所(倉敷学園)との継続的な交流計画を立てにくい実情がある。そのため、単発ではあるが合同イベントを企画中である。	今年度は、近隣園児との交流イベントを3月に予定中である。イベントの振り返りと共に、次年度以降の交流について近隣園と目的や計画を明確にしていく。